

「米松について」

平角担当：
有限会社尾花材木店
尾花 譲

今、この日本で、私が販売させていただいている米松の産地はどこか？という1 + 1 = ?のような問題。私はその昔、「和歌山」と答えた。

それは、木材界のサラブレッドではなく、良く吠える泥臭い弱い犬である私がまだお手伝いという名目、いや、もう少し家業に片足を突っこんでいた時代の話。当時は米松の梁材もグリーン材(生木)ばかりで、仕入れた在庫用梱包をフォークリフトで持ち上げ、下側を割れないように割れ止め材を塗る作業をしている時のことであった。

その作業を眺めていたお客さんから、「この米松、どこの木？」と聞かれ、木材業界の古き風習、まだまだモノは目で盗んで覚える時代、覚えようという意識が無く、教えを乞うこともなかった私は、仕入れている製材工場の都道府県名、「和歌山」、と大胆に答えた。無論、お客さんの反応は薄かったように思う。今は、良き指導者の方々に出会い、日々勉強であります。当時は知ろうとしない無知。樹木も外来魚のように繁殖していると思っていた。そこで初めて意識した。

米松とは一体何モノでどこから来ているのか。

学術的には

ダグラス・ファー

学名 Pseudotsuga menziesii (Pseudoとは、偽りのという意味。Pseudotsuga=トガサワラ属≠偽物の榎) マツ

科 トガサワラ属 (常緑針葉樹)

原産地 北米

1826年カナダのバンクーバー島で発見したイギリス王立園芸協会会員の植物学者David Douglas氏が命名。ツガ属であり葉の形がモミに似ていることからファーが付き、ダグラスファーと名付けられたとされています。

日本に初めて持ち込まれたのは、1853(嘉永6)年7月8日浦賀に来航した黒船と共に、ペリーが持ち込んだ献上品の中に、米松を使ったものがあっていわれています。黒船艦隊の甲板にも米松が使われていたようで、江戸時代初期から200年程続いた大船建造の禁が、幕末の同年10月1日に解禁された後、日本の



米松KD
(少々見栄え良い材)

軍艦の甲板にも多く米松が使われるようになり、日露戦争以後輸入が拡大されました。扱いやすく丈夫で大きい材が取れるということもあり、明治時代の日本ではメリケンマツと呼ばれ、住宅用資材にも多く使われるようになっていき、関東大震災の復興資材としても大量に輸入され、市場は拡大されていきました。1992年の環境保護の為の伐採禁止を発端としたウッドショックを契機に、欧州集成材が市場で拡大し、梁材としての確固たる地位を奪われていくことになり、現在は乾燥材主軸の米松KDと欧州集成材が価格と供給でライバル関係にあります。

ペリー来日、黒船来航、彼が持ち込んできたものや狙い、それが本日の私の生活にまで影響している事は、今まで感じていませんでした。歴史の1ページでありながらも、個人的な意見ですが、逆算すると良く出来たシナリオだとも感じます。ペリーが持ち込んだものは何か？米松。持ってきてくれて、ありがとう。

米松の木質についてですが、先日、昔のアメリカ産の米松は本当に良いものだったぞ。と、ベテランの方から聞いたことがあります。製材した時の木肌が黄色で美しく、それが時間と共に赤茶褐色の所謂ダグラスファーの色に仕上がっていく様が、本当に良いものだったと。そういった時期や出材地域やオールダグロスと呼ばれる樹齢等による丸太の質や呼称の違いについては、後ほど羽山さんからご説明があると思いますので、私の米松入門編的な語りはこの辺りで失礼いたします。

米松を扱う者として、重い、節が大きい、乾燥による割れがある、ヤニが出る、乾燥材の製材がやや難儀、など、沢山のご意見や声を聞きます。このような意見に対して、木材業に従事する私なりの見解を記したいと思います。（※会社の総意ではありません）

重い→その分、強い。

節が大きい→大胆でワイルド、それがカッコいい特徴でもあります。もちろん、ご要望に応じて、小節のものもありますし、板目が綺麗な梁材も見つかります。

乾燥による割れがある→乾燥材製造メーカーと乾燥機メーカーの研究と経験で、内部割れも含めて、近年は実に少なくなり、評判は良いです。私の経験的には、良い木ほど割れやすい。綺麗な薔薇には棘があるというか、美しいものは儂いといえますか。（おそらく目が詰まっている故に乾燥が難しいのかもしれませんが。）

ヤニが出る→こればかりは、少々デメリット感がありますが、木の粘りやや潤った感じは、このヤニの成分のおかげかと。私も、作業着や手袋などに付着することはありますが、まだまだこの木も生きてるな。と実感します。

乾燥材の製材がやや難儀→度々製材業者さんには、お世話になっております。乾燥しているが故、硬いようで。癖のある幅広材の場合、製材機の刃物が止まってしまうぐらいの強さがあります。



米松平角に変わってしまった地松梁タイコ
今だからこそ地松も雰囲気あります

燃えやすいというイメージ→北米産木材ということもあってか、キャンプやバーベキュー等で、火力の強い米松の木っ端が活躍します。スプルスなどを持って行った時に、煙ばかりで火力がなく、これは中止だな。と感じたことがありました。不燃不燃などと唱える現代ですが、木は燃えるもの。そういった環境の中で、どう大切にしていくかという考えも大切ではないでしょうか？モノが燃えるということはどういう事かという教育も大事だな。と独身ながらも思っております。

ワイルドで男らしく、そして、時折美しい。ペリーさんが持ってきて、近年の日本の住宅を支えてきた、そんな米松が、ダグラスファーが私は大好きです。

最後に、米松に似ている日本固有のマツ科の常緑高木として、トガサワラ【榎榎】があるが、生息している地域に和歌山が含まれていることだけは書き残しておきます。

※トガサワラ＝本州中部（三重県・和歌山県・奈良県）及び四国（高知県）の限られた地域に自生する。蓄積量は少ない。

弊社と価格市況調査委員会でも取り扱いのある

「SPF材についても、少々お話ししたいと思います。」

ホームセンターで売っている白くて安くて扱いやすい軽い木。それがSPFです。日本に大々的に輸入され始めたのは、およそ半世紀前。桝組壁工法が契機になります。

桝組壁工法に関する技術基準が告示されたのが、1974年7月所謂、ツーバイフォー工法とも呼ばれる建築方法が日本でオープン化されました。桝組壁工法はアメリカの住宅の在来工法であり、19世紀開拓時代に家族総出で素人でも出来るものとして考えられたものが起源。ツーバイフォー工法とは日本で生まれた呼び名だそうです。

告示前、このアメリカ型の建築方法を独自でアレンジ、国産の3寸角を半分に製材したものを2×4材に見立てて使用するなど、現地の工法を各社独自の方式で設計していたため、北米産ディメンションランバーを輸入

して設計するということはありませんでした。(古くは北海道の時計台や屯田兵の宿舎が桝組壁工法で建てられたようです。また、アメリカに暮らしていた日本人が一軒丸ごと資材を輸入して建築したという僅かな例もあるようです。)

そこで、日本の旧態依存した在来構法の木造住宅に対するコストダウンや生産性の合理化を計るべく、技術基準を告示、オープン化した、と考えられています。国による高度成長時代における政策の一つとしては、大きなものを感じます。国内生産した材料で作るのではなく、材料を輸入し現地の方式で建て



SPF
(格付機関名や製造工場番号等)

る。その考えが広まり、同時にSPFの輸入量も格段に増えました。(2019年5月だけで、約90,000m³の国内入荷があります。)

枠組壁工法のオープン化により、住宅建築の販売ルートの変革や近代はプレカット化、など、従来の材木店、工務店などの在り方が変化していくことになりましたので、住宅業界、木材業界の変化の大きな一因かと思います。

SPFの素材について

Spruce

トウヒ属/エングルマンズプルース、ホワイトズプルース

Pine

マツ属/ロジポールパイン

Fir

モミ属/アルパインファー、バルサムファー、グランドファー

の針葉樹です。カナダには商業用針葉樹林が多くあり、カナダ林産業審議会(COFI)などの基準を用い、各工場でグレーディングされ出荷されます。日本向けにはJ-GRADEという高い基準があり、出荷製品の7.8%程度しか生産されません。以前に、低いグレードの梱包を見たことがありますが、丸身だらけ節だらけでした。日本の風潮として、見えるところ、見えないところ構わず、見た目、質の良いものを使いたいというところが強いのかなと感じます。そういう要望を現地のサプライヤーに受けてもらい、J-GRADEという基準が守られています。ただ、乾燥してプレーナーかけてR面取りして、しっかり梱包をかけても、それでも木なので、曲りや捻じれ、割れはあり、梱包バラした瞬間、J-GRADE?って思うこともあります。以前に見た下位グレード材のイメージがあるため、バンドルの個体差は受け入れ、運が良い日悪い日もあるなど楽しみつつ、研究しています。

商品の差は、同じカナダ出身とはいえ、地域や湖、山、時期など様々な要因があり、メーカーでの差というより環境の方が大きいような気がしています。無論、メーカーで区別するのが一番わかりやすいのですが、工場の違いが一番大きいです。(以前は工場指定での仕入れも可能だったようですが、今は無理との事)あとは、梱包の保存方法は、社内で徹底してやっています。しっかり安定して置いておく。良い材も、放置するとあっという間に曲がってしまいますから。

現地工場の番号は木に印字されている認定スタンプに記載。77とか114とか。ホームセンター売りの場合、スタンプが毛嫌いされることもあるようです。サンダーをピピっとかければすぐ消えます。

木材のグレーディングに関しては、機械が丸太の木取りを瞬時に判別し、製材します。サイズ、コストなど人間の手によって入力されたものを元に、どう取れば一番理想的な木取りになるかを機械が行う。商社の話によると、想像以上に速いそうです。それは、工場の規模も壮大ですし、悩んでる暇はないのでしょう。

SPF サイズ早見表

2 × 4 →	1.5 × 3.5inch	38.1 × 88.9mm
2 × 6 →	1.5 × 5.5inch	38.1 × 139.7mm
2 × 8 →	1.5 × 7.25inch	38.1 × 184.1mm
2 × 10 →	1.5 × 9.25inch	38.1 × 235.0mm
2 × 12 →	1.5 × 11.25inch	38.1 × 285.8mm

価格の不安定さに関しては優等生

昨今、SPF 価格の変動がお騒がせすることがありますが、現地で大量に使用され、大量輸出材でありながら、300、400、700ドルなどと現地価格変動が激しいのがSPFの弱点です。1992年のウッドショック以前は200ドルで安定してあったものが、ウッドショックを契機に450ドルまで高騰しました。ただその当時は円高が進んでおり、円換算での価格は維持。その後300～450ドルを行ったり来たりすることが続きます。更に、ここ2年程の動きは激しくなり300～700ドルをジェットコースターしています。この先もこの価格変動は続いていくと思われまます。この不安定さからSPF離れをするビルダーも少なくなく、国産の杉での生産も見受けられます。ただ歩留まりや、巾広材の製造等を考えると、SPFに代用となる材は難しいのかなとも思います。サザンイエローパインのディメンション材も現地では製造使用されていますが、日本で広まるかという、ん？です。

今後価格変動や需給に関して懸念されることは、丸太出材の減少です。SPF材に見受けられるブルーステインの原因でもある、マウンテンパインビートルの被害を防ぐための伐採が完了しました。被害を受ける前に伐採、出材された大量の丸太の消費が進む中、今度は伐採規制が強くなり、今後は丸太出材量が見込め無い状況に変化。現在は出荷が鈍る中ですが、今後丸太不足も考えられ、入荷量が厳しくなる恐れがあります。

SPFは本当に軽くて扱いやすい材だと思います。簡単な日曜大工作業には実に重宝されます。同じディメンションランバーのダグラスファーと比べた場合、圧倒的軽さは魅力だと思います。

今回、このような木材について深く知ろうとする機会を与えていただき、委員会、問屋組合の皆様には感謝しております。木材を通じて大勢の方々との交流や、ご指導を頂きたいと思っています。こんな無礼で若輩者ですが、是非お見知りおきを。